二者関係に及ぼす相互の自己評価の効果に関する実験的検討*1

―自尊心理論・自己一貫性理論・ソシオン理論をめぐって―

石　盛　真　徳*2

問　題

対人魅力に影響を及ぼす諸要因は、大別すれば認知均衡理論的あるいは強化理論的志向性のいずれかをもつ理論的立場から検討され、それぞれに統合的な理解が試みられている（明田, 1994; 長田, 1977; 横田, 1981）。しかし対人魅力に影響を及ぼす要因としての自己に焦点が当てられる場合には、Jones（1973）やStroebe（1977）が指摘するように、対人関係の基本である二者関係においてでさえ、認知均衡理論、強化理論それぞれの立場から矛盾した予測が行われている。この研究領域において認知均衡理論的立場を代表する自己一貫性理論と強化理論的立場を代表する自尊心理論の予測矛盾は、具体的には個人の自己評価が低い場合、その個人が自分に対して好意的あるいは非好意的な他者に対して魅力を感じるのかどうかという点に関して生じている（Table 1参照）*3。そしてこの予測矛盾についてこれまで多くの実証研究で検討が行われている（e.g., Dutton, 1972; Hoyle, Insko, & Moniz, 1992; 梶田, 1966; Shrauger, 1975; Regan, 1976; Walster, 1965）が、いずれか一方の理論予測を支持する一貫した結果は得られていない（Cramer, 1998）。

両理論の予測矛盾が生じる原因はそれぞれの二者関係モデルの構成の違いにある。まず自己一貫性理論では明田（1994）も指摘するように、「評価する自己」と「評価される自己」という2つの機能的な自己を想定することにより、Heider（1958）のP-O-Xモデルに代表される認知均衡理論を二者関係に応用し

Table 1　自己評価と他者から受け取った評価の関数として予想される他者への評定の好意性（Jones, 1973）

自己評価	他者からの評価			
	一貫性理論		自尊心理論	
	正	負	正	負
高	＋	－	＋	－
低	－	＋	＋＋	－－

ている（Fig. 1 参照）。したがって「評価される自己」へと向かう 2 つの評価、すなわち自己評価と他者からの評価間の関係に均衡状態が成立するように他者への評価が決定される。それゆえ自己評価がネガティブな場合には、他者からの評価がネガティブであればそれら 2 つの評価が一致するため、他者への評価はポジティブな状態で均衡し、逆に他者からのポジティブな評価はネガティブな自己評価と一致しないので他者への評価はネガティブとなることで、均衡状態をもたらす。

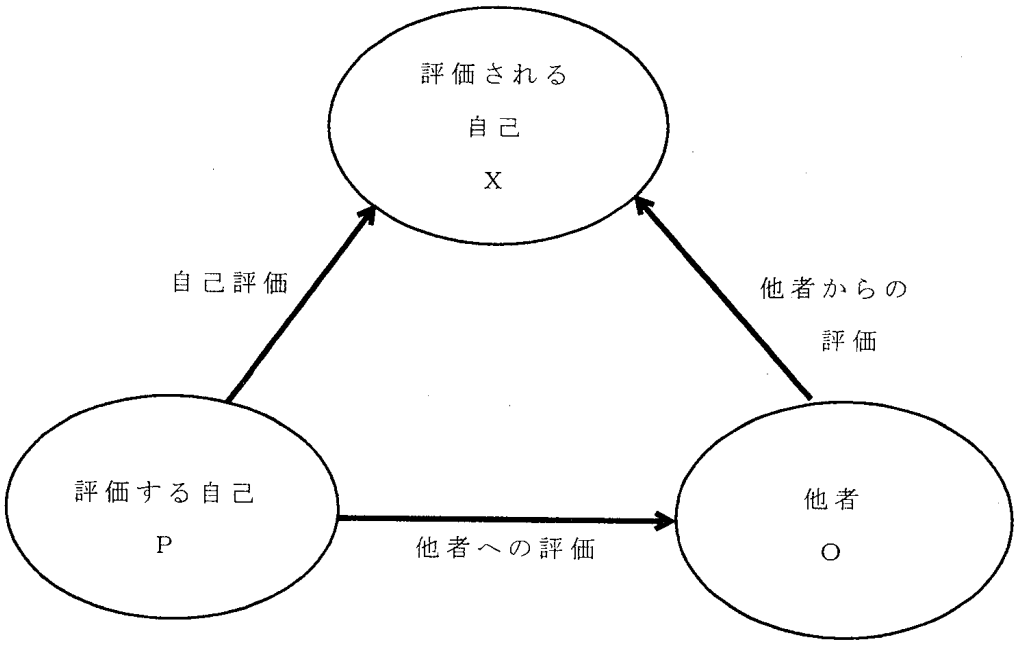

Fig. 1　自己一貫性理論の二者関係モデル

次に、Dittes（1959）にまでさかのぼることのできる自尊心理論の二者関係モデルでは、個人は基本的には他者からの評価に対して、同程度の評価を返報することが想定される。つまり、「人々は援助してくれた人々に対して援助すべきであり、援助してくれた人々を傷つけるべきではない（Gouldner, 1960, p.171）」というの返報性の規範が、二者間の好意の交換過程においても成立すると想定しているのである。実際、二者関係における好意評価あるいは非好意的評価の返報性が成立することはいくつかの実証的研究によって確認されている（Deutsch & Solomon, 1959; Jones, Gergen, & Davis, 1962; Harvey, Kelley, & Shapiro, 1957）。さらに自尊心理論の二者関係モデルでは、自己の内部に返報する評価の増幅装置として機能する自尊心が組み込まれている（Fig. 2 参照）。そこでは、自尊心の高さは他者からの受容の欲求の程度に逆比例する。したがって自尊心の低い、つまり他者からの受容の欲求が高いときには、他者からのポジティブな評価はよりポジティブに、ネガティブな評価はよりネガティブに、増幅されて他者へ返報される。自尊心理論はその基礎に、人々が特に自己評価が低いときには、自己への好意という心理的報酬を求めるという動機をおいている点で強化理論的である。またすでに述べたように、対人魅力を二者間の好意の交換過程として捉える社会的交換理論的な側面ももっている。

以上の両モデルの検討から、自己評価が低い状況における自己一貫性理論と自尊心理論の間の予測矛盾の原因が、自己評価と自尊心という概念の機能の相違にあることが明らかとなった。すなわち、前者では均衡状態にいたる認知シ

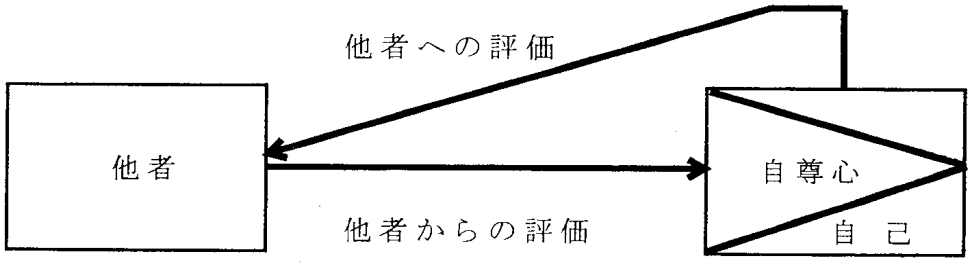

Fig. 2　自尊心理論の二者関係モデル

ステムの一要素としての自己評価が問題とされるのに対し、後者においては返報される評価の増幅装置としての自尊心に焦点が当てられている。そもそも自己評価と自尊心は自己研究においては、身体的魅力や知性のような自分自身の特定の一面についての評価である自己評価と自己についてのより包括的な評価である自尊心として概念上も区別されるものである（Stroebe, 1977）。この両者の概念上の相違から、自己一貫性理論と自尊心理論では適用可能な状況が異なることがいくつかの研究において指摘がされている。第一にRegan（1976）は、自己一貫性理論の適用は自己評価と他者からの評価とが同じ特性についてなされたときに限定され、異なる特性について評価が行われたときには自尊心の影響が強くなると指摘している。第二にDutton（1972）は、自らの実験結果に基づき、自己概念の明確なときには自己一貫性理論の予測が当てはまり、自己概念が不明確なときには自尊心理論が適用されると主張している。つまり、自己一貫性理論の適用には自他の評価対象の同一性が必要条件となるというのである。ただDutton（1972）の実験では、自己概念の明確性は論理ゲームにおける成績が安定しているかどうかにより操作されているが、論理ゲームの成績によって自己評価が客観的に明らかとなり、さらに自他からの評価対象の同一性という自己一貫性理論の前提が満たされ、なおかつ他者からの評価が自己評価と一致しない状況では、被評価者はその他者について不正確な評価を行う人物であるという印象を持つのではないであろうか。そしてそういったネガティブな印象形成が他者へネガティブな評価につながるのであれば、自己一貫性理論が想定する、「評価される自己」への評価間の関係に均衡状態が成立するように他者への評価が決定される、という心理的メカニズムが働いているわけではなくなる。第三にShrauger（1975）は、ネガティブな自己概念を持つ人々は望ましくないフィードバックに対しかなりアンビバレントな反応を行う、と述べている。つまり、ネガティブな自己概念を持つ個人は認知レベルではそのフィードバックに対し価値をおくが感情的には嫌悪する。そしてそのために、被験者の評価者についての好意を測定する研究は一般的に自尊心理論を支持し、評価者の能力に関する被験者の評価を測定する研究は自己一貫性理論

を支持する傾向にあるという。第四に直接に両理論の適用範囲の違いについて言及したものではないが、自己評価を自己の特定の一面についての評価という狭義の意味ではなく、抑うつ的な自己観をもつかどうかというより広義の意味に捉えなおし、自己評価の対人魅力への影響を検討したSwann, Wenzlaff, and Tafarodi（1992）の研究では、自己一貫性理論（彼らの呼び方では自己確証理）論の立場を支持する結果が得られている。Wylie（1961）は自己満足、自己受容、自己に対する好意、自己に対する態度、自尊心などの諸概念は必ずしも同意語ではなく、意図するところは多少異なっているにもかかわらず、どの概念も一般的、包括的な評価的態度を表している点で共通であると考え、それらを自己関連態度と総称している。これには広義の自己評価も含まれると考えられる。

従来の研究の概観からは、自己一貫性理論は自己評価という自己の一面についての評価を問題にしているだけであって適用範囲が狭く、より包括的な自己に対する評価である自尊心を要因として組み込む自尊心理論の影響が一般により強いであろうことが示された。では、自尊心理論によって二者関係における対人的相互作用のダイナミックスは十分にとらえられているのであろうか。すでに検討したように、自尊心理論の中核は二者間の社会的交換過程における返報性の原理であり、その上で、自尊心はそれ自体が低い場合に限って、他者からの評価をそれと同一方向へ成極化する効果をもつのであった。とすると、他者からは決してポジティブな評価を受けることはないのに自分からはポジティブな評価を返し続けているというような非対称的な関係を理解できないことになる。それに対して、個人と社会の相互依存性についての関係論的自己組織化ネットワーク理論である、ソシオンの二者関係論（藤澤, 1997）では、自己の自尊心だけではなく他者の自尊心もその二者関係モデルに組み込むことによって、非対称的な社会的交換過程も含む二者間の相互作用について包括的なモデルを提出している（Fig. 3 参照）。もちろんRusbult and Arriaga（2000）が指摘するように、現実の非対称な関係、例えば、ある女性と虐待をするパートナーとの関係が維持されることには、学習性無力感といった個人の傾性や職業訓練や労働経験の不足といった能力的要因（そういった人々にとっては経済的自

立が困難で、皮肉にもその関係から脱出しないという選択肢が相対的には最も高い満足度をもたらす）など、個人的要因も関わっているであろう。しかし現実には様々な別の要因が考えられるとしても、純粋な二者間の社会的交換過程において非対称性が成立するためのロジックを検討することにはなお意味があると考えられる。

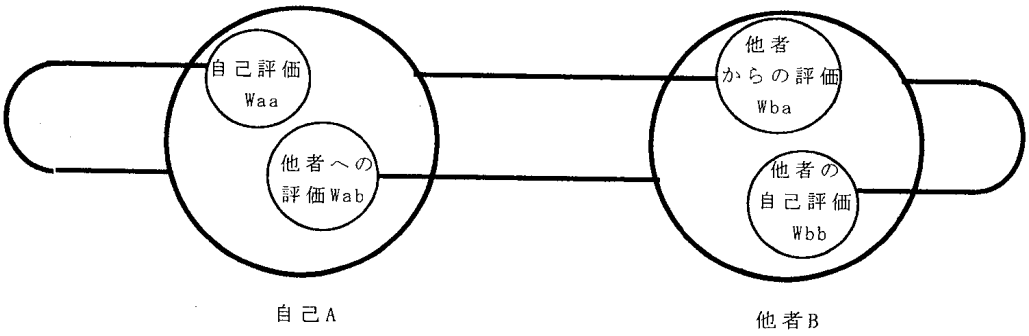

Fig. 2　自尊心理論の二者関係モデル

ソシオンの二者関係におけるダイナミックスは社会交換理論と互報性の法則によって（1）式で表現される（藤澤, 1997）。

$$\Delta W^{t+1}_{ab} = \eta (W^{t}_{aa} \cdot W^{t}_{ba} - W^{t}_{bb} \cdot W^{t}_{ab}) \qquad (1)式$$

（1）式は、ΔW^{t+1}_{ab}（t+1時点におけるAからBへの評価の変化）が$W^{t}_{ba} - W^{t}_{bb}$（t時点における、BからAへの評価とAからBへの評価との差）と、それぞれ重み付けとして機能するW^{t}_{aa}（t時点におけるAの自己評価）とW^{t}_{bb}（t時点におけるBの自己評価の推測）という要因によって規定されることを意味する。そしてW^{t}_{aa}とW^{t}_{bb}の正負の符号が一致するときにはお互いの評価差を解消しようという平等化が生じ、W^{t}_{aa}とW^{t}_{bb}の正・負の符号が異なる場合にはお互いの評価差を拡大しようとする差異化が生じることが予測される。この点がともに交換理論的志向性をもつソシオン理論と自尊心理論の一番の相違点であるといえる。つまり、自尊心理論が自己評価が低い場合に他者からの評価をそれと同一方向へ成極化することしか予測し得ないのに対し、ソシオン理論では他者の自己評価の状態によっては他者からの評価の符号を逆転させて返報する事態が生

じることも予測しているのである。ソシオンの二者関係論と自尊心理論とのもう一つの相違点として、従属変数の違いがある。自尊心理論ではすでに他者に対して抱いている評価についてはまったく考慮されていない。それに対して、ソシオンの二者関係論における従属変数は、他者に対しすでに持っている評価がポジティブ・ネガティブのどちらの方向にどれだけに変化するかという変化量である。その点で、ソシオン理論のほうがすでに成立した関係において、時系列的に繰り返し行われる社会的相互作用をより精緻にモデル化したものといえるであろう。

以上の理論的検討を踏まえ、本研究では、自己一貫性理論、自尊心理論、そしてソシオン理論から導出される予測についての実験的検討を行う。検証される各理論からの予測は以下のとおりである。

自己一貫性理論の予測

自己評価と正負が一致する相手からの評価は相手へのポジティブな評価を生じさせる。逆に、自己評価と正負が一致しない相手からの評価は相手へのネガティブな評価を生じさせる。

自尊心理論の予測

相手からのポジティブな評価に対しては相手へのポジティブな評価で応え、逆に、相手からのネガティブな評価に対しては相手へのネガティブな評価で応える。そしてその返報される相手への評価は、自己評価高群においてよりも、自己評価低群においてより成極化したものとなる。

ソシオン理論の仮説

平等化：自分と相手の自己評価の正負が同一の場合、相手からの評価が相手への評価を上回っていれば、その次の時点の相手への評価はよりポジティブなものとなり、逆に相手からの評価が相手への評価を下回っていれば、その次の時点の相手への評価はよりネガティブなものとなる。

差異化：自分と相手の自己評価の正負が異なる場合、相手からの評価が相手への評価を上回っていても、その次の時点の相手への評価はよりネガティブなものとなり、また逆に、相手からの評価が相手への評価を下回っていても、その次の時点の相手への評価はよりポジティブなものとなる。

方　法

被験者　K大学社会学部で心理学の授業を受講する大学生から256名（男性128名、女性128名）を選び、互いに未知の同姓ペア128組を作成した。

実験計画　協同作業の成績（高・低）と相手からの評価（ポジティブ・ネガティブ）の2×2条件に、男女ペアそれぞれ16組32名を割り当てた。

実施日と場所　実験は1995年６月にK大学の心理観察室において実施された。

手続き　実験者と向かい合って、ペアとなった被験者二人が並んで着席した。机の中央部には衝立が設けられ、作業中の相手の顔を見ることはできないが、相手の手の動きを見ながら協同して作業を行なうことのできる状況が作られた。

（１）作業開始前の口頭での教示。

教示では次の３点が強調された。第一にペアとなった被験者２人が協力して行う作業であること。第二に協同作業では図形の完成課題３問を１試行し、合計３試行繰り返し同じペアで行うものであること。第三に実験中はペアの相手と会話を交わさないこと。そして実験に先立って、実験者が作業課題である図形課題の完成方法について、例題を用いて実演しながら説明を行った。

（２）協同作業の実施。

実験者が課題カードを提示してから20秒間は被験者２人で課題カードの左右にカードを試行錯誤的に当てはめる。20秒後に被験者各自がそれぞれ選択カードを決定することで最終的に１つの図形を完成させる。この図形の完成課題を３回行った。

（３）作業成績についての操作。

成績ポジティブ群には「あなたのおかげで協同作業は成功しました」という

カードを、成績ネガティブ群には「あなたのせいで協同作業は失敗しました」というカードを提示することで、成績条件の操作を行った。なお、この作業成績の操作は被験者の自己評価のポジティブ・ネガティブを操作する目的で行われた。

（4）1回目の相手への評価と自己評価の測定。

1回目の相手への評価を「温かくて感じの良い人だ－冷たくて感じの悪い人間だ」、「喜んで一緒に続けたい－嫌なので一緒に続けたくない」2項目で測定した（以下の評価測定はすべて7件法）。同時に、1回目の自己評価を、「優れている―劣っている」、「好きな―嫌いな」など自己の能力に関する側面と自己への情緒的評価の側面の両方を含むSD 9項目により測定した。なお、本実験では3理論の予測の検討のために、自己についての包括的な情緒的評価という広義の自己評価についての定義を採用し、操作的定義を行った。

（5）相手からの評価の操作。

相手への評価を回答した質問紙を回収後、相手からの評価であるとして以下のように教示した。相手からの評価ポジティブ群：「あなたが温かくて感じの良い人なので、パートナーは喜んで一緒に続けたいと考えています」、相手からの評価ネガティブ群：「あなたが冷たくて感じの悪い人なので、パートナーはこれ以上一緒に続けたくないと考えています」。

（6）2回目の自己評価測定と相手の自己評価についての推測の測定。

2回目の自己評価と相手の自己評価についての推測をともに（4）と同じSD9項目により測定した。

（7）2回目の相手への評価の測定。

第二試行を開始する前に、2回目の相手への評価を（4）と同じ尺度で測定した。

（8）作業成績および相手からの評価の認知の測定。

作業成績のポジティブ・ネガティブおよび相手からの評価のポジティブ・ネガティブの認知について2件法で測定した。

実際には第二試行には進まず、この時点で実験終了とした。また、すべての

実験終了後にデブリーフィングを被験者全員に対して行った。

結果および考察

尺度の信頼性

実験で測定した各尺度項目について信頼性分析を行った。その結果、各評価尺度の信頼性係数 α は、1回目の相手への評価2項目（.76）と1回目の自己評価9項目（.83）、2回目の自己評価9項目（.86）と相手の自己評価の推測9項目（.91）、および2回目の相手への評価2項目（.86）のすべてにおいて高く、各評価尺度の一次元性が確認された。そこで以降では、各尺度値の合計得点をもとに分析を行った。

条件操作と認知の対応

成績のポジティブ・ネガティブと成績のポジティブ・ネガティブの認知についてクロスの集計をもとに、X^2検定を行った結果、条件操作と認知の対応が確認された（X^2（1）＝91.1, p<.001）。また、同様な分析の結果、相手からの評価のポジティブ・ネガティブの条件操作と評価のポジティブ・ネガティブ認知についても対応が確認された（X^2（1）＝129.5, p<.001）。以上のように、統計上は条件操作と認知の対応が確認されたが、クロス集計表からは少数ながらも一定の割合で、条件操作と認知が対応していない被験者も存在していることが読み取れた。その原因としては、認知の測定が実験の最終段階で行われたために二つの条件操作の影響が交絡している可能性があげられる。そこで各認知について、2つの条件操作との多重クロス集計を行った。その結果、成績の条件操作による相手からの評価認知への影響は認められなかったが、相手からの評価の条件操作の影響が成績認知に及んでいることが明らかとなった。具体的には、成績ポジティブ条件でも、相手からの評価ネガティブ条件では42.2%が成績をネガティブとの認知を行っていた。これは実験での課題がペアとなった二人で協力して図形を完成させるというものであったために、たとえ実験者から成績

ポジティブという教示がおこなわれても、協同作業の相手からネガティブな評価を受けた場合には作業自体は不成功であったと認知された結果であろう。本実験での成績の操作は被験者の自己評価をポジティブ・ネガティブに振り分ける目的で行われたものであるので、二つの操作の認知へ交絡は重大な問題ではない。むしろこの交絡は相手からの評価についての条件操作の有効性を示すものと解釈できる。

操作の効果

はじめに成績のポジティブ・ネガティブの各尺度値への影響を検討するためにt検定を行った。その結果、1回目の相手への評価、1回目の自己評価、2回目の自己評価において有意差が認められた（順に、$t(254)=4.70$, $p<.001$; $t(254)=5.47$, $p<.001$; $t(254)=4.10$, $p<.001$）。相手の自己評価推測には有意差が認められなかった（成績ポジティブ$M=40.3$、成績ネガティブ$M=38.8$、$t(254)=1.53$, n.s.）。1回目の自己評価と2回目の自己評価はともに、成績ポジティブ条件の方が成績ネガティブ条件よりも高かった（1回目の自己評価：成績ポジティブ$M=38.6$、成績ネガティブ$M=34.2$；2回目の自己評価：成績ポジティブ$M=37.8$、成績ネガティブ$M=34.4$）。この結果は、成績のポジティブ・ネガティブ条件によって被験者の自己評価がポジティブ・ネガティブに振り分けられ、その効果が2回目の測定にまで持続していたことを示す結果である。そして1回目の相手への評価において、成績ポジティブ条件（$M=10.0$）が成績ネガティブ条件（$M=8.8$）よりも高く好意的であったという結果は、協同作業における成績の良さがその相手に対する対人的魅力にも波及していることを示している。

次に相手からの評価条件のポジティブ・ネガティブの各尺度値への影響を検討するためにt検定を行った。その結果、相手の自己評価の推測と2回目の相手への評価において有意差が認められた（順に、$t(254)=4.22$, $p<.001$; $t(254)=12.22$, $p<.001$）。相手の自己評価は、相手からの評価ネガティブ条件（$M=37.6$）においてよりも、ポジティブ条件（$M=41.6$）においてより高いと

推測されていた。そして、相手への評価は相手からの評価ポジティブ条件でポジティブであり（$M=11.12$）、ネガティブ条件でネガティブであった（$M=7.85$）。この結果は、ポジティブな評価に対してはポジティブな評価で、ネガティブな評価に対してはネガティブな評価で応えるという、返報性が成立していたことを示している。

相互の自己評価の効果についての検討

成績のポジティブ・ネガティブにより被験者の１回目と２回目の自己評価がポジティブ・ネガティブに振り分けられていることが確認されたので、各自己評価の効果の検討に先立って、各被験者の１回目と２回目の自己評価得点をそれぞれ中位点である36点でポジティブ・ネガティブに分割した。なお両得点とも36点が中央値でもあった。次に相手の自己評価推定得点に関しては、中央値の39点でポジティブ・ネガティブに分割した。中位点が中央値とならなかったのは、相手の自己評価の推定得点が、成績のポジティブ・ネガティブではなく、相手からの評価のポジティブ・ネガティブによって影響を受け（２要因の分散分析の結果、交互作用は見られなかった。$F(1,252)=.53$, n.s.）、平均値が中位点よりも若干ポジティブ方向にシフトしていたためである。しかし結果の解釈に影響を及ぼすほどのバイアスではないので、相手の自己評価の推定得点に関してもポジティブ・ネガティブ条件として、以下の分析を行った。

１回目の自己評価の効果

はじめに１回目の自己評価のポジティブ・ネガティブにより各評価得点に差があるかどうかを検討するためにt検定を行った。その結果、２回目の自己評価（自己評価ポジティブ$M=39.9$、自己評価ネガティブ$M=32.4$、$t(254)=10.12$, $p<.001$）と相手の自己評価の推測（自己評価ポジティブ$M=41.2$、自己評価ネガティブ$M=38.0$、$t(254)=3.41$, $p<.001$）において有意差が認められた。第一の２回目の自己評価による有意差は、１回目の自己評価の差がそのまま維持されていることを示している。これはすでに確認されている結果であるが、

さらに相手からの評価との交互作用についても検討するために、2回目の自己評価を従属変数として、1回目の自己評価のポジティブ・ネガティブ×相手からの評価のポジティブ・ネガティブの2要因の分散分析を行った。その結果においては、1回目の自己評価の主効果のみが有意で、相手からの評価の主効果および交互作用は認められなかった（$F(1,252)=.39$, n.s.）。第二の相手の自己評価推測による有意差は、自己評価が高いものは相手の自己評価も高く推測していたという新たな知見を示している。この知見についても、相手からの評価との交互作用について検討するため、相手の自己評価の推測を従属変数に、1回目の自己評価のポジティブ・ネガティブ×相手からの評価のポジティブ・ネガティブの2要因の分散分析を行った。その結果、交互作用はみられず、それぞれの主効果のみが有意であった（順に、$F(1,252)=10.99$, $p<.001$; $F(1,252)=17.14$, $p<.001$）。この分散分析の結果からも、成績の操作によって変動した自己評価が、その共変動分以外にも、独立して相手の自己評価の推測を高めるという効果をもつことが明らかとなった。これは、今川・岩淵（1981）が、好意的な二者間の対人認知過程に関する因子分析的研究から、自己像は他者像そのものより他者の自己像の推測のなかにより投影されやすいと結論づけたことと対応している。

ところで、1回目の自己評価のポジティブ・ネガティブは、単独では2回目の相手への評価には影響していないことが確認された（自己評価ポジティブ$M=9.52$、自己評価ネガティブ$M=9.45$、$t(254)=.23$, n.s.）。しかし自己一貫性理論と自尊心理論の予測からすれば、相手からの評価の操作と交互作用こそが重要とされるので、2回目の相手への評価を従属変数として、1回目の自己評価のポジティブ・ネガティブ×相手からの評価のポジティブ・ネガティブの2要因の分散分析を行った（Fig. 4参照）。その結果、相手からの評価の主効果のみが有意で、自己評価の主効果と交互作用は認められなかった（順に、$F(1,252)=148.13$, $p<.001$; $F(1,252)=.08$, n.s.; $F(1,252)=.01$, n.s.）。

相手からの評価の主効果のみが有意で、自己評価の主効果と交互作用のいず

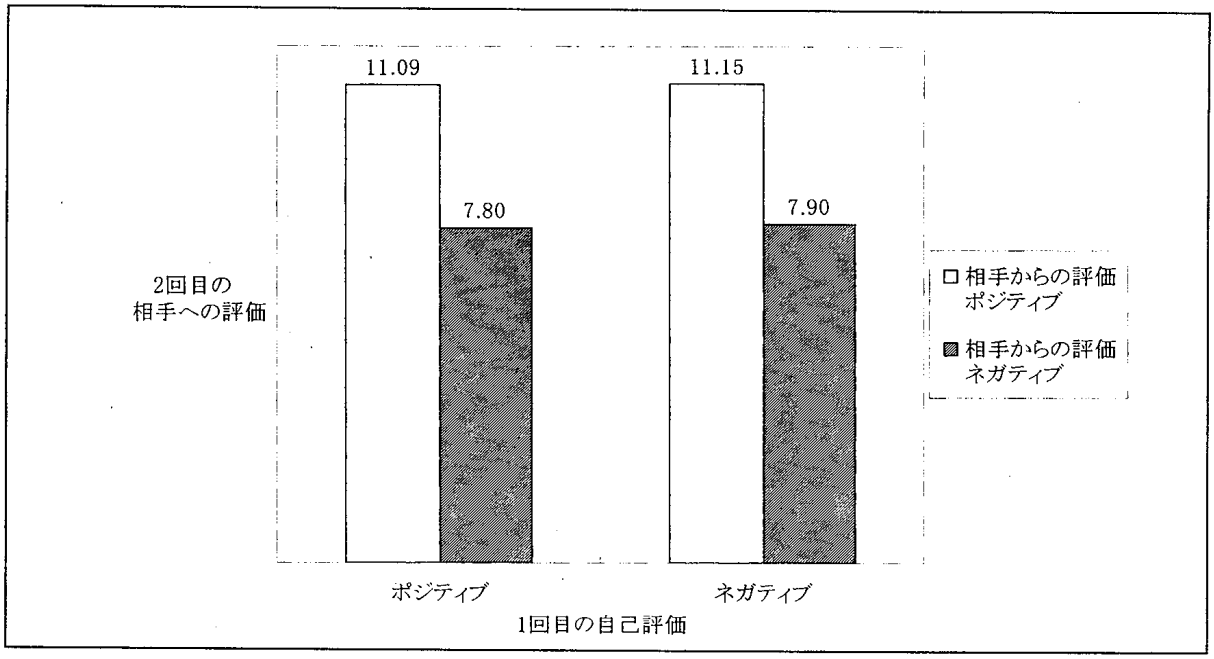

Fig. 4　2回目の相手への評価における1回目の自己評価と相手からの自己評価の効果

れも認められなかったという結果は、返報性が成立していることを再確認するものであると同時に、相手への評価に自己評価が効果を持っていないという点において、自己一貫性理論と自尊心理論のどちらの予測も支持してないものである。ただし操作の効果の検討結果からは、作業成績が相手への魅力に影響を及ぼすこと、そして条件操作と認知の対応の検討結果からは、相手からの評価が成績の認知に影響を及ぼすことも明らかとなっている。それゆえ自己評価の効果を検討するためには、従属変数として、それらの交絡要因の影響が分離されていない2回目の相手への評価ではなく、1回目の相手への評価から2回目の相手への評価における変化量を用いるべきである。また既に述べたように、この実験手続き上の問題がなくとも、そもそも相手との間にすでに何らかの心理的関係を構築している以上、従属変数は相手への評価における変化量にすべきという理論上の要請がある。そこで相手への評価の変化量を従属変数として、11回目の自己評価のポジティブ・ネガティブ×相手からの評価のポジティブ・ネガティブの2要因の分散分析を行った（Fig. 5 参照）。その結果、それぞれの主効果のみが有意であった（順に、$F(1,252)=8.82$, $p<.01$; $F(1,252)=155.02$, $p<.001$）。

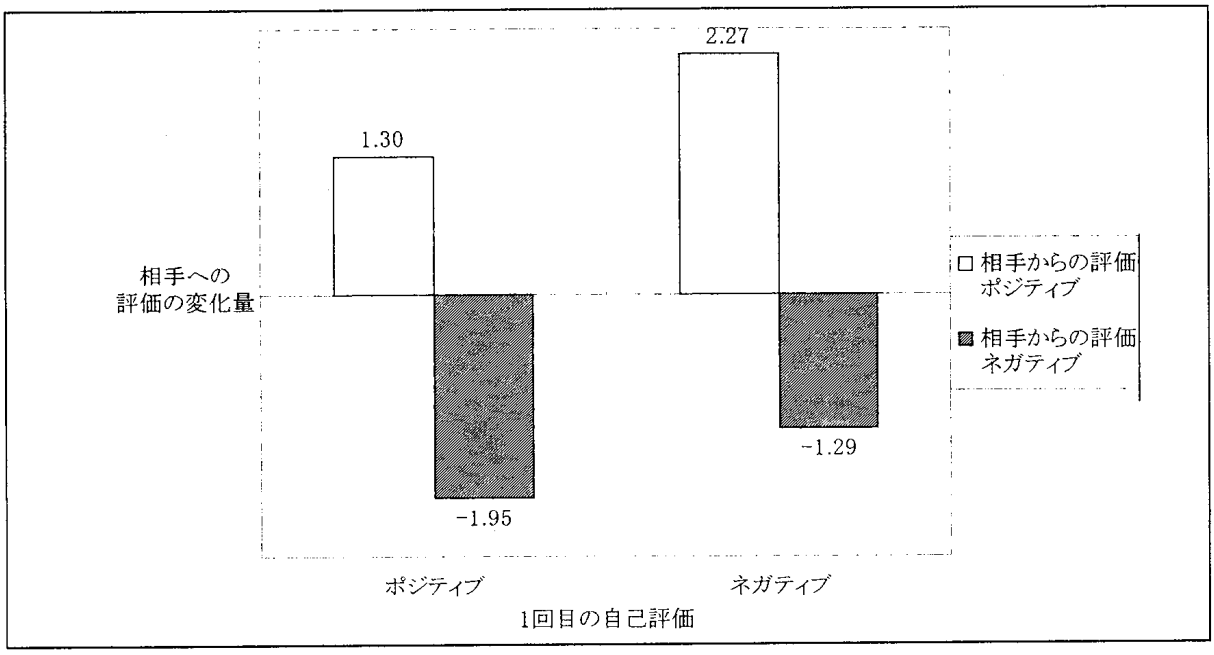

Fig. 5　相手への評価の変化量における１回目の自己評価と相手からの自己評価の効果

この結果は、さらに返報性の成立を再確認するものであるとともに、独立した要因として自己評価が効果をもっていることを示すものである。具体的には、相手からの評価がポジティブな場合には、自己評価がポジティブであるよりもネガティブである方が、相手への評価がよりポジティブとなっている点では、自尊心理論を支持している。しかし相手からの評価がネガティブな場合には、自己評価がネガティブであるよりもポジティブである方が、相手への評価がよりネガティブとなっている点においては、自尊心理論は支持されていない。その場合、自己評価は、それ自身が相手からの評価と正負の符号が異なる場合に、相手からの評価をそれ以上あるいは以下にして返報するという機能を果たしている。自己評価がポジティブな人がネガティブな評価を受けた場合、自己評価がネガティブな人よりも、相手によりネガティブな評価を返すということは、ポジティブな自己観に脅威を感じたことの反発とも考えられる。

２回目の自己評価の効果

２回目の相手への評価を従属変数として、２回目の自己評価のポジティブ・ネガティブ×相手からの評価のポジティブ・ネガティブの２要因の分散分析を

行った。その結果、相手からの評価の主効果のみが有意で、自己評価の主効果と交互作用は認められなかった（順に、$F(1,252)=142.28$, $p<.001$; $F(1,252)=1.51$, n.s.; $F(1,252)=.16$, n.s.）。これは1回目の自己評価に関する分析とほぼ同じ結果であった。そこで次に相手への評価の変化量を従属変数として、2回目の自己評価のポジティブ・ネガティブ×相手からの評価のポジティブ・ネガティブの2要因の分散分析を行った（Fig. 6 参照）。その結果、自己評価と相手からの評価の主効果、交互作用のすべてにおいて有意差が認められた（順に、$F(1,252)=4.16$, $p<.05$; $F(1,252)=143.86$, $p<.001$; $F(1,252)=6.72$, $p<.01$）。

交互作用が認められたので、相手からの評価のポジティブ・ネガティブ別に、相手への評価の変化量を従属変数、2回目の自己評価のポジティブ・ネガティブを独立変数とするt検定を行った。その結果、相手からの評価のポジティブ条件では有意差が認められた（$t(126)=3.71$, $p<.001$）。ネガティブ条件では有意差が認められなかった（$t(126)=.35$, n.s.）。この結果より、交互作用は、相手からの評価がネガティブな場合に、自己評価による効果を均等化する効果があることが明らかとなった。また2回目の自己評価は相手からの評価を教示された直後に測定されたので、相手からの評価自体が2回目の自己評価に影響し

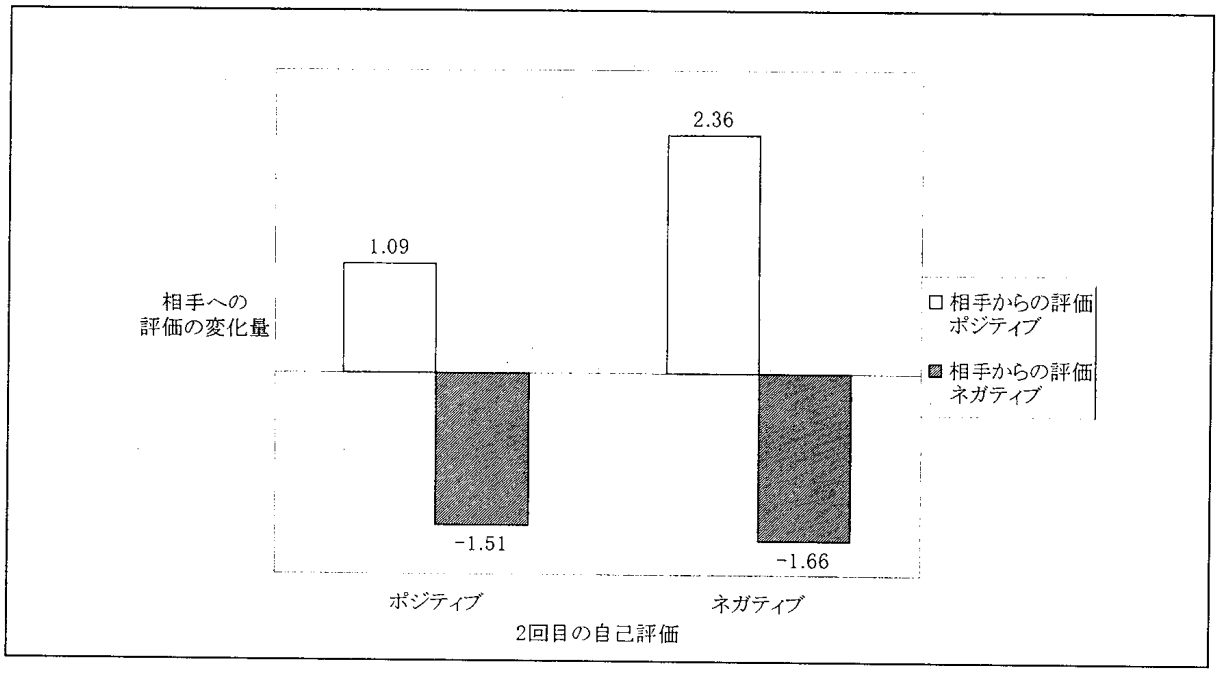

Fig. 6　相手への評価の変化量における2回目の自己評価と相手からの自己評価の効果

ている可能性がある。そこで測定間の自己評価の変化量を従属変数、相手からの評価条件のポジティブ・ネガティブを独立変数とするt検定を行った。その結果、相手からの評価ポジティブ条件では自己評価がよりポジティブに($M=.41$)、相手からの評価ネガティブ条件では自己評価がよりネガティブに($M=-.96$)、変化していたことが明らかとなった（$t(254)=2.48$, $p<.05$)。この結果は、短時間の実験上の相互作用によっても、自己評価自体が相手からの評価によって変動することを示している。測定された自己評価を所与のものとして扱っている自己一貫性理論と自尊心理論では、この結果に対する説明力をもたない。それに対し、(1) 式では自己評価の変動は明示的に取り扱われていないが、ソシオン理論においては、自己評価の変動は二者関係における社会的情緒を生起する主要因として、その理論的展開において重要な位置づけをなされている（藤澤, 1997)。

相手の自己評価の効果

これまでの分析結果より、変化量を従属変数とした場合、相手からの評価がポジティブな場合には、1回目の自己評価と2回目の自己評価のどちらもが、自尊心理論の予測と一致する効果をもつが、相手からの評価がネガティブな場合には、1回目の自己評価と2回目の自己評価のどちらにおいても、自尊心理論の予測が支持されないことが明らかとなった。ただしこれまではソシオン理論で想定されている相手の自己評価の推測を分析の対象としていなかったので、以下で検討を行った。2回目の相手への評価を従属変数として、2回目の自己評価のポジティブ・ネガティブ×相手の自己評価推測の高低×相手からの評価のポジティブ・ネガティブの3要因の分散分析を行った。その結果、相手の自己評価推測と相手からの評価の主効果のみが有意であった（順に、$F(1,248)=67.74$, $p<.001$; $F(1,248)=104.01$, $p<.001$)。相手の自己評価を高く推測している方が、低く推測しているよりも、相手への評価が高くなっていた(推測高$M=10.46$、推測低$M=8.52$)。この結果は、相手への評価に対して、相手の自己評価推測という要因の効果を想定するソシオンの二者関係モデルの意

義を示しているといえる。次に相手への評価の変化量を従属変数として、2回目の自己評価のポジティブ・ネガティブ×相手の自己評価推測の高低×相手からの評価のポジティブ・ネガティブの3要因の分散分析を行った。その結果、相手からの評価の主効果、自己評価と相手からの評価の交互作用が有意で（順に、$F(1,248)=125.18$, $p<.001$; $F(1,248)=6.68$, $p<.01$）、自己評価の主効果、相手の自己評価推測と相手からの評価の交互作用に傾向差があった（順に、$F(1,248)=3.04$, $p<.10$; $F(1,248)=2.91$, $p<.10$）。つまり、相手への評価の変化量を問題とするときには、相手からの評価と自己評価の主効果と、相手からの評価に対して、自己評価と相手の自己評価推測がそれぞれ交互作用をもつという結果であった（Fig. 7およびFig. 8参照）。

そして相手からのネガティブな評価を受けた場合には、相手の自己評価の推測の高いほうが、相手の自己評価の推測の低い場合よりも、よりネガティブな評価に変化させていた。これは自己評価が高いと推測される相手からのネガティブな評価は自己にとってより脅威であり、それに対しよりネガティブな反応をする結果と解釈できるのではないだろうか。これらの相手への評価の変化に自己評価と相手の自己評価の推測が交互作用を持つという結果は、ソシオン理論の（1）式の予測と一致しており、ソシオンの二者関係論を支持する結果で

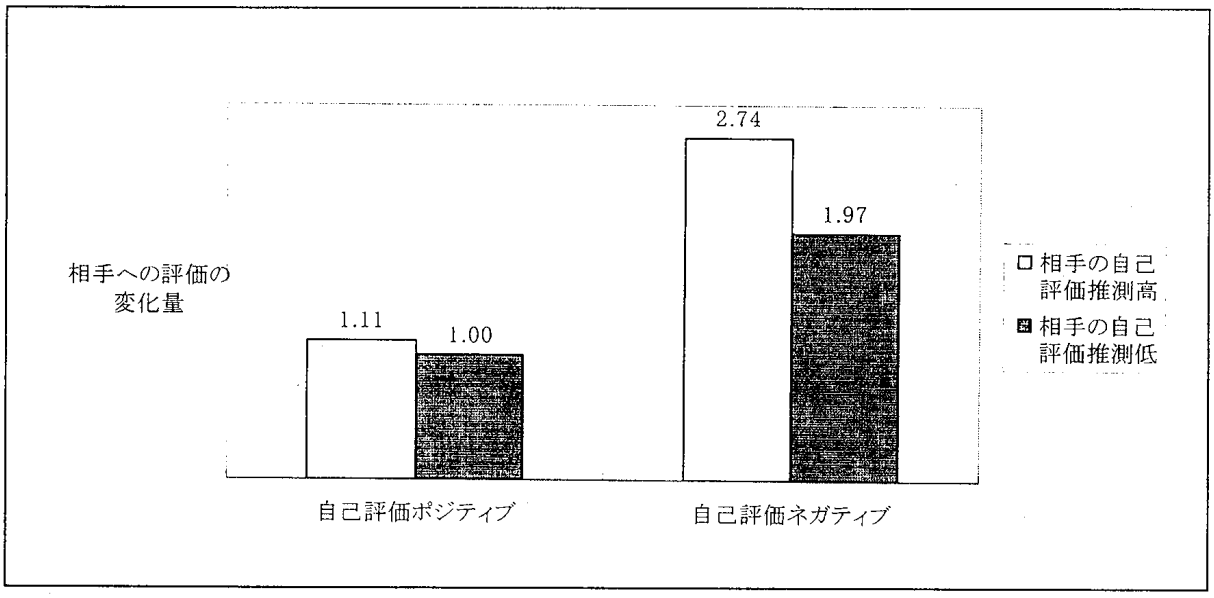

Fig. 7　相手からの評価がポジティブな場合の相互の自己評価の効果

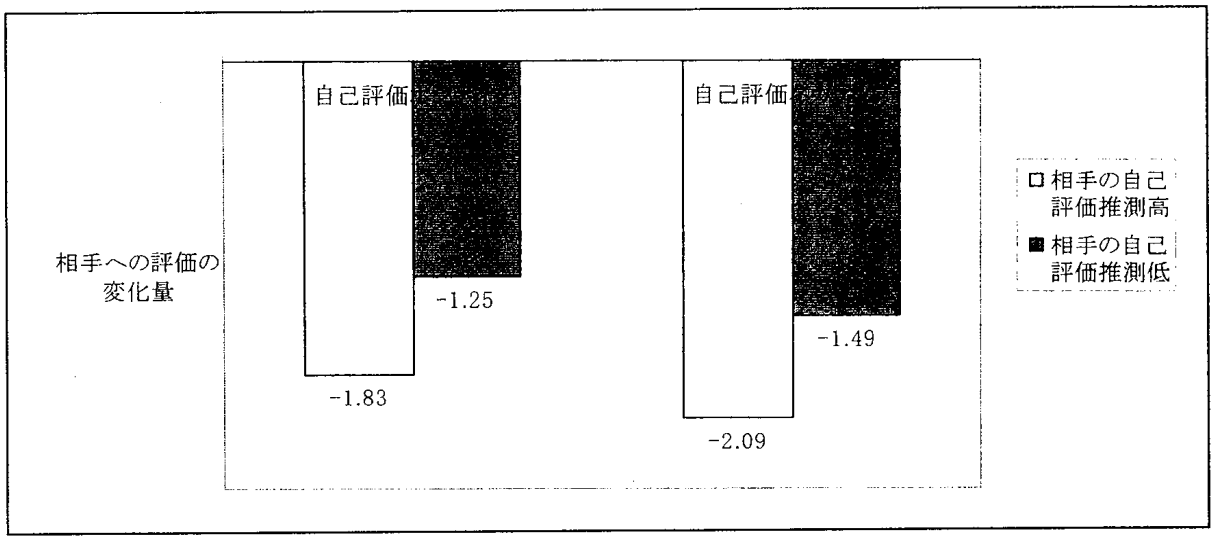

Fig. 8　相手からの評価がネガティブな場合の相互自己評価の効果

ある。しかし本実験では、相手からの評価は教示によって操作され、直接測定はされなかったため、平等化と差異化の生じる条件については具体的に検討することはできなかった。ただし二者関係における社会的交換過程に、相互の自己評価が効果をもつことを示した点において、本実験は重要な意味を持つであろう。

まとめ

相手への評価を従属変数とした場合には、相手からの評価との返報性が成立していることが確認された。ただし、1回目、2回目の自己評価ともに主効果が有意ではなく、しかもどちらの自己評価にも相手からの評価との交互作用が認められず、自己一貫性理論と自尊心理論のどちらの予測も支持されなかった。しかし相手への評価の変化量を従属変数とした場合には、1回目、2回目の自己評価ともに主効果が有意であった。さらに2回目の自己評価に関しては、相手からの評価との交互作用も有意であり、交互作用は相手からの評価がネガティブな場合に自己評価による効果を均等化する効果をもっていた。自尊心理論の予測は相手からの評価がポジティブな場合には支持されたが、相手からの評価がネガティブである場合には予測とは逆の結果となった。相手への評価に関

しては、相手の自己評価推測という要因の効果が確認された。そして相手への評価の変化量に関しては、相手の自己評価の推測は相手からの評価との交互作用効果も持つことが明らかとなった。したがって相手の自己評価推測が、二者関係において自己評価と同じく効果をもつことを予想したソシオンの二者関係論の有効性は示されたといえる。しかし本研究では、実験手続き上平等化と差異化の生じる条件については検討することはできなかったため、今後のさらなる検討が必要とされる。

引用文献

明田芳久（1994）対人魅力　明田芳久・岡本浩一・奥田秀宇・外山みどり・山口勧『社会心理学　ベーシック現代心理学7』有斐閣, pp.81-96.

Byrne, D.（1971）*The attraction paradigm*. Academic Press.

Cramer, D.（1998）Close relationships: *The study of love and friendships*. Arnold.

Deutsch, M. & Solomon, L.（1959）Reactions to evaluations by others as influenced by self-evaluations. *Sociometry*, 22, 93-112.

Dittes, J. E.（1959）Attractiveness of groups as function of self-esteem and acceptance by group. *Journal of abnormal and and social psychology*, 59, 77-82.

Dutton, D. G.（1972）Effect of feedback parameters on congruency versus positivity effects in reactions to personal evaluations. *Journal of personality and social psychology*, 24, 366-371.

藤澤等（1997）ソシオン理論のコア 北大路書房.

Gouldner, A. W.（1960）The norm of reciprocity: A preliminary statement. American *Sociological Review*, 25, 161-178.

Harvey, O. J., Kelley, H. H., & Shapiro, M. M.（1957）Reactions to unfavorable evaluations of the self made by other persons. *Journal of Personality*, 25, 393-411.

Heider, F. (1958) *The psychology of interpersonal relations*. Wiley.

Hoyle, R. F., Insko, C. A., & Moniz, A. J. (1992) Self-esteem, evaluative feedback, and preacquaintance attraction: Indirect reactions to success and failure. *Motivation and Emotion*, 16, 79-101.

今川民雄・岩淵次郎 (1981) 対人認知過程の構造について—好意的2人関係の因子分析的研究—実験社会心理学研究, 21,41-51.

Jones, E. E., Gergen, K. J., & Davis, K. E. (1962) Some determinants of reactions to being approved or disapproved as a person. *Psychological Monograph*, 76, 17.

Jones, S. C. (1973) Self- and interpersonal evaluations. *Psychological Bulletin*, 79, 185-199.

梶田叡一 (1966) 2者関係に及ぼす自己評価の効果 - 他者からの働きかけに対する反応を規定する要因として—教育社会心理学研究, 5, 231-238.

長田雅喜 (1977) 親和性と好意性 水原泰介 (編)『個人の社会的行動　講座社会心理学1』東京大学出版会, pp.91-129.

Regan, W. J. (1976) Liking for evaluators:consistency and self-esteem theories. *Journal of experimental social psychology*, 12, 159-169.

Rusbult, C. E. & Arriaga, X. B. (2000) Interdependence in personal relationships. In W. Ickes & S. Duck (Eds.) *The social psychology of personal relationships*. John Wiley and Sons, 79-108.

Shrauger, J. S. (1975) Responses to evaluation as a function of initial self-perceptions. *Psychological Bulletin*, 82, 581-596.

Stroebe, W. (1977) Self-esteem and interpersonal attraction. In S. Duck (Ed.) *Theory and practice in interpersonal attraction*. Academic Press, 79-104.

Swann, W. B. Jr., Wenzlaff, R. M., & Tafarodi, R. W. (1992) Depression and the Search for negative evaluations: More evidence of the role of self-verification strivings. *Journal of Abnormal Psychology*, 101, 314-317.

Walster, E. (1965) The effect of self-esteem on romantic liking. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1, 184-197.

Wylie, R. C. (1961) *The self concept- A critical survey of pertinent research literature*. University of Nebraska Press.

横田澄司 (1981) 自己評価機能と社会的行動—社会心理学序説—酒井書店.

註

＊1　本研究の一部は、日本心理学会第61回大会において発表した。なお、本研究の実施に際しては、県立長崎シーボルト大学の藤澤等先生に多大なるご協力を賜りました。ここに記し、感謝いたします。

＊2　京都光華女子大学人間関係学部所属

＊3　Cramer (1998) は、Byrne (1971) の類似性—魅力理論も含めた3つの立場について検討しているが、Byrne (1971) の理論の予測は、人々は自分たち自身を好んでいるかどうかに関わらず自分を好んでくれる人々を好む、という自己評価の影響を無視したものであり、二者関係に及ぼす自己評価の効果を検討する本研究では取り上げない。